再時、十八九人の同勢が、ぞろ〳〵と野を越えて駆けて來た。中には巡査も交つたが、早や壕の向ふの高い石垣の上に、森の枝を傳ふ躰の雪枝の姿を、小さな鳥に成つて、雲に入り行く、と視めたであらう。……

手を擧げ、帽を振り、杖を廻はしなどして、わあわつと聲を上げたが、其の内に、一人、草に落た女の片腕を見たものがある。それから一溜りもなく裏崩れして、眞書間の山の野原を、一散に、や、雲を霞。

森の幕が颯と落ちて、双六谷が舞臺の如く眼前に開かれたやうに雪枝は思つた。……惡處難路を辿りはしたが、然まて時が經つたとも思はず、別に其が爲に、と思ふ疲勞も增さない。て、足を運ぶ内に至り着いたので、宛然、城址の塲所から、森を土塀に、一重隔て た背中合はせの隣家ぐらゐにしか感じない。――最も案内をすると

云ふ老爺より、坊主の方が、すた〳〵先へ立つて歩行いたが。

時に、眞先に、一朶の櫻が靄靄として、霞の中に朦朧たる光を放つて、山懷に靡くのが、翌方の明星見るやう、巖陰を出た目に颯と映つた。

四五六谷

四十三

『叱！』

と老爺が警蹕めいた聲を、我と我が口へ轡に懸ける。

トなだらかな、薄紫の崖なりに、櫻の影を霞の被衣、ふうわり背中から裳へ落して、鼓草と菫の敷滿ちた巖を前に、其の美女が居たのてある。

少時、一行は呼吸を凝らした。

見よ！見よ！巖の面は滑かに、質の青い鮑を刻んで、花の色を映したれば、恰も紫の筋を彫つた、自然に奇代の双六盤。盤面には花を摘んだ、大輪の菫と皷草とが、陽炎の輝く中に、皷草は濃く、菫は薄く、美しく色を分つて、十二輪、十二輪、二十四輪の駒なるよ……向ふ合はせに區劃を隔てゝ、二輪、一輪、一輪、二輪、空に蒔繪した星の如く、浮彫したやう並べられた。

美女は、やゝ俯向いて、其の駒を熟と視める風情の、黒髪に唯一輪、……白い皷草をさして居た。此の色の花は、一谷に他には無かつた。

輕く其の黒髪を戰がしに來る風もなしに、空なる櫻が、はら〳〵と散つたが、鳥も啼かぬ靜かさに、花片の音がする……一片……二片……三片……

『三つ』と鶯のやうな聲、袖のあたりが搖れたと思へば、蝶が一ッ

ひら〳〵と來て、磐の上をすつと行く……

「一つ、」

と美女は又算へて、鼓草の駒を取つて、格子の中へ、……菫の花の色を分けて、靜に置替へながら、莞爾と微笑む。……

氣高い中に其の優しさ。

「は、」と、思はず雪枝は、此方に潜みながら押堪へた息が發奮んだ。

「誰？……」

と美女の聲が懸る。

老爺が咳を一つ故として、雪枝の背中を丁と突出す。これに押出されたやうに、跪踞いて、鼓草菫の花を行く、雲踏む浮足、ふらふらと成つたまゝて、双六の前に渠は兩手を支いて跪いたのてあつた。

坊主は懷中の輪袈裟を取つて懸け、老爺は麻袋を探つた、烏帽子を丁と冠つて、更めてづゝと出た。

美女は密と鬢を壓へた。
聲も出せぬ雪枝に代つて、老爺が始終を物語つた……
坊主は、時々眼を開いて、聞澄す美女の横顔を窺ひ見る。
「お姫様、」
と語り果てゝ老爺が呼んで、
「お助けを遣はされ、さあ、少い人、願へ。」
「姫様、」
と雪枝は、窶れに窶れた人間の顔して見上げた。
「上臈どの、」と坊主も言足す。
美女は引合はせた袖を開いた。而して、
「天守のお使者、天守のお使者。」
と二聲呼ばるゝ。
「やあ、拙僧が事か、」と、間を措いて坊主が答へた。

「あの、其の指をお指しになれば、天守の方の、お心が通じますかえ。」
「如何にも。」と片手を握つて、片手を其の蒼い頰げたに並べて、横に開いて應じたのである。
「双六を打つて賭けませう。私は其の他の事は何にも知らねば……而して、私が負けましたら、其切仕力がありません。もし、あの、私が勝となれば、此のお方の其の奥様を、恙なう、お戻しになりますやうに……お約束が出來ませうか。」
と物優しいが力ある聲して聞く。
坊主は言下に空を指した。
「天守に於ては、豫て貴女と双六を打つて慰みたいが、御承知なければ、致やうも無かつた折から……丁ど饒倖、いや固より、固より望み申す處……とある！」

四十四

美女は世にも嬉しげに……早や頼まれて人を救ふ、善根功德を仕遂げた如く微笑みながら、左右に、雪枝と老爺とを艶麗に見て、清しい瞳を目配せした。

「そんなら、私が勝ちましたら、奥様をお返しなさいますね。」

「御念に及ばぬ、城ヶ沼の底に湧く……靈泉に浴させて、傷もなく疲勞もなく苦惱もなく、健かにしてお返し申す。」

美女は、十二の數の、黄と紫を、兩方へ、颯と分けて、

「天守のお方。どちらの駒を……」

「赫燿として日に輝く、黄金の花は勝色、皷草を私が方へ。」

と痩せた頰げたの膨らむまで、坊主は浮色に成つて笑を含んで、駒を二つづゝ六行に。

同じく二つづゝ六行に……紫の格子に並べた。

「紫は朱を奪ふ、お姫様菫の花が、勝負事には勝色ぢや。」

と老爺は盤面を差覗いて、坊主を流盼に勇んだ顔色。

これに苦笑ひ爲て口を結んだ、坊主は心急く樣子が見えて、

「さ！上蔔、」

「お客なれば貴僧から、」

「や、采は、上蔔。」と高聲て言つた。

「空を行く雲の數、」

と眉を開いて見上ぐる天を、白い雲が來ては消え、白い雲が來ては消えする。

「櫻の花の散るのを數へ、舞ひ來る蝶の翼を算んで、貴僧、私と順々に。」

坊主は頷いて袈裟を搖つた。

「言ふ目。」
と高く美女が。
「乞目、」
と坊主が、互に一聲。鶯と梟と、同時に聲を縣合はせた。
「一つ來て、二つぢや。」
と鶴の姿の雲を睨んで、皺草は格子を動く。
ト美女は袂を取つて、袖を斜めに、嚔を流せば、心ある如く櫻の枝から、花片がさら〳〵と白く簪の花を掠める時、紅の色を增して、受け取る袖に翻然と留まつた。
「右が三つ、」
と袖を返して、左の袂を靜かに引くと、また花片がちらりと來る。
「一つと二つ、」
と菫の花が白い指から格子へ入つた。

「雲よ、雲よ、雲よ、」
と呼んで、氣色ばんで、やゝ坊主があせり出した。――爭ひの半てあつた。
「雲が來る、花が降る。や、此の采は氣が長いぞ。見て居る內に笄の柄が朽ち、玉手箱が破れうも知れぬが。少い人、其の采を……其の采を出さつしやい。うつかり見惚れて私も忘れた。」
と目の覺めたやうに老爺が言つた。
青年は疾くから心着いて、佛舍利のやうに手に捧げて居たのを、密と美女の前へ出した。
「一つ振つたり、」
と老爺が傍から、肝入れして、采を盤石に投げさせた。
「お姫樣、それ〳〵、星が一つて、梅が五ぢや。瞬する間に、十度も目が出る。早く、もし、其て勝負を着けさつせえまし。」

「天下の重寶、私もつひ是に氣が着かなんだ。」
と坊主は手早く拾ひ取る。
「いえ、急いては成りません、花の數、蝶の數、雲の數て無くつては。」と美女は頭を振つた。
「えゝ、お姫樣の！何うやら今までの乞目ては、一度に一年も縣りさうぢや。お庇と私等は飢うも、だるうも無けれと、肝心助け取らうと云ふ、奥樣の身をお察しやれ。一息に血一點、一刻に肉一分は絞られる、削られる……天守の梁に倒て、身の鞭に暇はないげな。」
「其の通り。」と傲然として、坊主は身構へ爲て袖を掲げた。

四十五

美女の顏の色は早や是非なげに見えた。
一が起き、六が出て、三に變り、二に顧り、五が並ぶ。天に星の

輝く如く、采の目の疾く、駒の烈しく動くに連れて、中空を見よ、岫を湧き、谷を飛ぶ、消えた雲が殘り、續く雲が累り、追ふ雲が結び着いて、雲はやがて厚く、雲はやがて濃く、既にして近くなり、低く成つた。……
忽ち一片、美女の面にも雲の影が映すよと見れば、一谷は暗く成つた。
鋭き山颪が颯と來ると、舞下る雲に交つて、漂ふ如く薄の薫が燈としたが、拭ひ去つて、つゝと消えると、電が空を切つた。……坊主の法衣は、大巖の色の亂れた双六の盤を蔽ふて、四邊は墨よりも蔭が黑い。
ト暗夜の如き山懷を、櫻の花は矢を射るばかり、白い雨と散り滋ぐ。其の間をくわつと輝く、電光の縫目から空を破つて突出した、坊主の面は物凄しいものである……

唯見れば、頭に、無手と一本の角生ひたり。顔面黒く漆して、目の隈、鼻頭、透通る紫陽花に藍を流しす、額から頤に掛けて、長さ三尺、口から口へ其の巾五尺、仁王の顔を上に二つ下に三つ合はせたばかり、目に餘る大さと成つて、カチ〳〵と齒の鳴る時、鰐かと思ふ大口を赫と開いて、上頤を嘗める舌が赤い。

「騒ぐまい、時々ある……深山幽谷の變じや。少い人、誰の顔も何の姿も、何う變るか知んねえだ！慄くと氣が狂ふぞ、目を塞いで踞れ、蹲め、突伏せ、目を塞げい。」

と老爺が呼はる。

雪枝はハッと身を伏せて、巖に吸込まれるかと呼吸を詰めたが、胸の動悸が、持上げ搖上げ、山谷盡く震ふを覺えた。

般々として雷が響く。

音の中に、

「切らう！」

と思切つた美女の、細い透る聲音が、胸を抉つて耳を貫く。

「何を、切ればと言ふて早や今は……乞目！」

と誇立つた坊主の聲が響いたが。

「やあ、勝つた。」

と叫んで、大音に呵々と笑ふと齋しく、空を指した指の尖へ、法衣の裙が衝と上つた、黒雲の袖を捲いて、虚空へ電を曳いて飛ぶ。

と風の餘波に寂として、谷は瞬く間に、もとの陽炎。

が、日の光りやゝ弱く、衣のひた〳〵と身に着く處に、薄い影が纖細くさして、散亂れた櫻の花の、背に頸にかゝつたまゝ、美女は、手を額に當てゝ、双六盤に差俯向いて、ものゝ惱ましげな風情であつた。

「お姫樣、」

と風に曲んだ烏帽子の紐を結直したが、老爺の聲も力が無かつた。
「姫樣。」
と膝行り寄つて、……雪枝が伸上るやうに膝を支いて、其の袖のあたりを拜んだ。
「頼まれたのに、濟みません。」
二筋三筋、後毛のふりかゝる顏を上げて、青年の顏を凝と視めて、睫毛の蔭に花の雫、衝と光つて、はら〳〵と玉の涙を落す。
老爺も鼻を詰らせた。
雪枝は身を絞つて湧出るやうに、熱い、柔い涙が流れた。
「斷念めます、……斷念める……私はお浦を思切ります。何うぞ、其の代り、夢でも可い、夢なら何時までも覺めずに、私を此處に、貴女の傍にお置き下さい。
貴下、生効ひのない私、罰も當れ、死んでも構はん。」

と前倒しに身を投げて、粹と美女の手に縋ると、振りも拂はず取添へて、
「雪樣。」
と優しく言ふ。
「え、」
いや、老爺も驚くまいか。

獅子の頭

四十六

「お懐しい。私は貴下が七歳の年紀、お傍に居たお友達……過世の緣て、戀しう成り、いつまでも〳〵、御一所にと思ふ心が、我知らず形に出て、都の如月に雪の降る晩。其の雪は、故郷から私を迎に來たものを、……歸る氣は些も無しに、貴下の背に凭かゝつて、

二階の部屋へ入りしなに、――貴下のお父様が御覽の目には、……急に貴下が大きく成つて、年ごろも對くらゐ、私と二人が夫婦のやうて熟と抱合ふ形に見えて、……怪しい女と、直ぐに其の場で、暖爐の灰にされましたが、戸の外面からひた〳〵寄る……迎ひの雪に煙を包んで、月の下を、舊の此の故郷へ歸りました。

非情のものが、戀をした咎を受けて、其の時から、唯一人で、今までも双六巖の番をして、雨露に打たれても、……貴下の事が忘れられぬ。

其の心が通ずるのか、貴下も年月經ち、日が經つても、私の事をお忘れなさらず、昨日までも一昨日までも、思ひ詰めて居て下さいましたが、奥様が出來たので、つひ餘所事になさいました。

それをお怨み申すのではない。嫉妬も猜みもせぬけれど、……口惜い、其がために、敵から仕事の恥辱をお受け遊ばす。……雲、花片

の數を算めば、思ふまゝの乞目が出て、双六に勝てたのに、……唯一刻を爭ふて、焦つてお悶へ遊ばすから、危いとは思ひながら、我儘おつしやる可愛らしさに、謹慎もつひ忘れ、心が亂れて、よもやに曳かされ、人間の采を使つたので、効なく敵に負けました。貴下も、惡い、私も惡い。

あゝ、花も恁う亂れぬうち、雲の中から奥様を助け出し、こゝへ並べて、蝶の蔭から、貴下の喜ぶ顔を見て、其の後て名告りたうございました。」

とまめやかに朱唇が動く、と花が囁くやうなのに、恍惚して我を忘れる雲枝より、飛驒の國の住人以つての外畏縮に及んで、

「南無三寶、あやまり果てた。」と烏帽子を掻いて猪頸に窘む。

「いえ〳〵此も定まる約束。……まかし、尙ほ懐しい。奥様を思切り、世を捨てゝも私の傍に命にかけて居やうとおつしやる。其のお

言葉で奥様は救はれます……私も又命にかけても、お望を遂げさせましやう。

さあ、貴下、あらためて、奥様を償ふための、木彫の像をお作り遊ばせ、勝れた、優つた、生命ある形代をお刻みなさい。

吃と敵に不足は言はせぬ。花片を雪にかへて、魔物の煩悩のほむらを冷す、價値のあるのを、私が作らせませう、……お爺さん、」

と見返つて、

「貴翁がお家重代の、其の小刀を、雪様にお貸し下さいまし。」

「心得ました。」

と謹んで持つて寄る、小刀を受取ると、密と取合つた手を放して、柔かに、優しく、雪枝の手の甲の、堅く成つて指も動かぬを、撫てさすりつゝ、美女が其の掌に握らせた。

四邊を晌し、衣紋を直して、雪枝に向つて、背後向きに、双六巌

に、初めは唯腰を掛ける姿と見えたが、褄を放して、盤の上へ、菫鼓草の駒を除けて、采を取つて横に寝た。

陽炎が裳に懸つた。

美女の風采は、紫の格目の上に、虹を枕した風情である。

雪枝は、倒れたと見て、つゝと起つた。

「：雪様、私の目を、私の眉を、私の額を、私の顔を、私の髪を、此のまゝに……其の小刀でお刻みなさいまし。」

「や、」と老爺が吃驚して、歯の抜けた聲を出して、

「成程、お天守で不足は言ふまい、が、當事もない、滅法界な。」

「雪様、痛くはない。血も出ぬ、眉を顰めるほどもない。突いて、斬つて、さあ、小刀で、此のなりに、……此のなりに、……」

「思切る、断念めた、女房なんぞ汚らはしい。貴女と一所に置いて下さい、お爺さんも頼んで下さい、最う一度手を取つて、」

愛然と、どき〳〵した小刀を投出す。
「其のお心の失せない内、早く小刀をお取りなさいまし。……そんな事をおつしやつて、奥様は、今何うして居らつしやいます。」
それを聞くや、
「わつ、」と泣いて、雪枝は横様に絶りついた、胸を突伏せて、唯戰く……
徐ら、其の背を、姉がするやう撫てながら、
「恁う成るのが定まり事、……人の運は一つづゝ天の星に宿ると言ひます。其と同じに日本國中、何處ともなう、或年或月或日に、其の人が行逢はす、山にも野にも、水にも樹にも、草にも石にも、橋にも家にも、前から定まる運があつて、花ならば、花、蝶ならば、蝶、雲ならば、雲に、美しくも凄くも寂しうも彩色されて描いてある……手を取合ふて睦み合ふて、もの言つて、二人居られる身ではない。

唯形ばかり、何時何處でも、貴方が思ふ時、其處に居る、念ずる時直ぐに逢へます、お呼び遊ばせば參られます。」
「早や、小刀を……、小刀を……、」
「歸命頂禮、南無不可思議、歸命頂禮、南無不可思議。」
と唱へながら、老爺が拾つて渡した時、雪枝は犀と小刀を取つた。
「一刀一拜、拜め、頼め、念じて、念じて、」
と勵まし敎うるが如くに老爺が言ふ。
「姫、姫、」
と勇ましく、
「疵を附けたら、私も死ぬ。」
と熟と見て、小刀を取直した。
美女の姿ありのまゝ、木彫の像と成つた時、膝に取つて、雪枝は犀と抱締めて離し得なんだ。

老爺が其の手を曳いて起こして、さて、かはる〴〵負ひもし、抱きもして、嶮岨難處を引返す。と二時が程に着いた双六谷を、城址までに、一夜、山中に野宿した。

其の夜の星の美しさ。

中にも山の端に近いのが、美女の像の額を飾つて輝いたのである。翌朝、棟の雲の切れ間を仰いで、勇ましく天守に昇ると、四階目を上切つた、五階の口で、フト暗い中に、金色の光を放つ、爛々たる眼を見た、

一目見て、

「やあ、祖父殿が、」

と老爺が叫ぶ、……其なるは、黄金の鯱の頭に似た、一個青面の獅子の頭、活けるが如き木彫の名作。楷を壓して、のつしとあり。角も、牙も、双六谷の黒雲の中に見た、其てあつた。……

祖父の作に、久しぶりの話がある、と美女の像を受取つて、老爺は天守に胡座して後に殘つた。時に、祖父が我まゝの、佗だと言つて、麻袋を、烏帽子入れたまゝ雪枝に讓つた。

さて、溫泉宿に跡つたが、人々は、雪枝の顏の色の淸々しいのを視めて、はじめて渡した一通の書信がある。

途中より、としてお浦の名て、二人が結婚を爲ない前から、契りを交はした少年の學生が一人ある。此の度の密月の旅の第一夜から、附絡ふて、隣の部屋に何時も宿る……其さへも恐ろしいのに、つひ言葉のはづみから、双六谷に分入つて、二世の契を賭けやうとする、聞けば名高い神秘の山奥、迚も罪深さに堪へないため、諸ともに身を隱す、とあつた。

渠は神色自若とした。

あはれ、神は、香村雪枝を守らせ給ふ！

然うて無いと、恁くまでに戀慕つた女、氣が狂はずには居なかつたのである。

東京に歸つて後、呼べは應へて顯はるゝ、双六谷の美女の像を、唯目を開いて見るやうに、すら〳〵と刻み得た。麻袋の鑿小刀は、如意自在に働く。

彫像の成つた時、北の一天、俄かに黒雲を捲起こして月夜ながら霰を飛ばした。

年經つて、再び双六の溫泉に遊んだ時、最う老爺は居なかつた。が、城址の濠には船があつて、繫てはない、老爺の妻が、木彫に成つて立つのを見て、渠は蘆間に手を支えて、やがて天守を拜した。

船に乘れば、すら〳〵と漕いて出て、燒けない處か、もとの位置へすつと戻る……傳へ聞く諾亞の船の如きものであらう。

神鑿

終

明治四拾四年貳月九日印刷
明治四拾四年貳月九日發行

不許複製

著作者　泉鏡太郎
發行者　東京市京橋區南鞘町十七番地　中村政之助
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
賣捌所　東京市日本橋區通一丁目十九番地　大倉書店
賣捌所　東京市日本橋區通正町一番地　服部書店

正價金九拾錢

發行所　東京市京橋區南鞘町十七番地　文泉堂書房

發賣所　東京市京橋區中橋廣小路前　川文榮閣
東京市神田區表神保町東京堂
大阪市東區備後町四丁目　寶文館

42

329
4

329
4

094131-000-5

329-4

神鑿

泉　鏡花/著

M42
DBQ-1611